

- 1 秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ
あき たの かりほの いは 苫 とま わが ころもで つゆ
- 2 春すぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山
はる 春 すぎて なつ 夏 来に けらし しろたへ 白妙の 衣 ほすてふ あま 天の 香具山
- 3 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む
あしびきの やまどり 山鳥の 尾の しだり 尾の ながながし 夜を ひとりかも 寝む
- 4 田子の浦に うちいでて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪はふりつつ
たご 田子の 浦に うちいでて 見れば しろたへ 白妙の 富士の 高嶺に 雪は ふりつつ
- 5 奥山に もみぢふみわけ なく鹿の 声聞くとときぞ 秋はかなしき
おくやま 奥山に もみぢ ふみわけ なく 鹿の 声聞くと ときぞ 秋は かなしき
- 6 かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白きを見れば 夜ぞふけにける
かささぎの 渡せる 橋に おく 霜の 白きを 見れば 夜ぞ ふけにける
- 7 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に いでし月かも
あま 天の 原 ふりさけ 見れば かすが 春日なる 三笠の 山に いでし 月かも
- 8 わが庵は 都のたつみ しかぞすむ 世をうち山と 人はいふなり
わが 庵は 都の たつみ しかぞ すむ 世を うち山と 人は いふなり
- 9 花の色は うつりにけりな いたづらに わが身よにふる ながめせしまに
はな 花の色は うつりに けりな いたづらに わが 身よに ふる ながめ せしまに
- 10 これやこの 行くも帰るも わかれては 知るも知らぬも あふ坂の関
これや この 行くも 帰るも わかれて は 知るも 知らぬも あふ坂の 関
- 11 わたの原 八十島かけて こぎいでぬと 人には告げよ あまのつり舟
わたの 原 八十島 かけて こぎいで ぬと 人には 告げよ あまの つり舟
- 12 天つ風 雲のかよひ路 吹きとぢよ をとめの姿 しばしとどめむ
あま 天つ風 雲のかよひ 路 吹きと ぢよ をとめの 姿 しばし とどめむ
- 13 つくばねの 峰よりおつる みなのか 小ひぞつもりて 淵となりぬる
つくばねの 峰より おつる みなのか 小ひぞつもりて 淵となり ぬる
- 14 みちのくの しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし われならなくに
みちのくの しのぶも ぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし われなら なくに
- 15 君がため 春の野にいでて 若菜つむ わが衣手に 雪はふりつつ
きみがため 春の 野にいでて 若菜 つむ わが 衣手に 雪は ふりつつ
- 16 立ちわかれ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば いま帰り来む
たちわかれ いなばの 山の 峰に 生ふる まつとし 聞かば いま 帰り来む
- 17 ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは
ちはやぶる 神代も きかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは
- 18 すみの江の 岸による波 よるさへや 夢のかよひ路 人めよくらむ
すみの 江の 岸による 波 よるさへや 夢のかよひ 路 人めよくらむ
- 19 難波潟 みじかき芦の ふしのまも あはでこの世を すぐしてよとや
なにはがた 難波潟 みじかき 芦の ふしのまも あはでこの 世を すぐしてよとや
- 20 わびぬれば いまはたおなじ 難波なる みをつくしても あはむとぞ思ふ
わびぬれば いまは たおなじ 難波なる みをつくしても あはむとぞ 思ふ
- 21 いまこむと いひしばかりに 長月の ありあけの月を 待ちいでつるかな
いまこむと いひしばかりに 長月の ありあけの 月を 待ちいでつる かな
- 22 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐といふらむ
ふく 吹くからに 秋の 草木の しをるれば むべ 山風を 嵐といふらむ
- 23 月みれば ちぢに物こそ かなしけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど
つき 月みれば ちぢに 物こそ かなしけれ わが 身ひとつの 秋には あらねど
- 24 このたびは ぬさもとりあはず 手向山 もみぢのにしき 神のまにまに
このたびは ぬさも とりあはず 手向山 もみぢのにしき 神のまにまに
- 25 名にしおはば 逢坂山の さねかづら 人にしられで 来るよしもがな
なにしおはば 逢坂山の さねかづら 人にしられで 来るよしもがな
- 26 小倉山 峰のもみぢば 心あらば いまひとたびの みゆき待たなむ
をぐらやま 小倉山 峰のもみぢば 心あらば いまひとたびの みゆき待たなむ
- 27 みかの原 わきて流るる いづみ川 いつみきとてか 恋しかるらむ
みかの 原 わきて 流るる いづみ川 いつみきとてか 恋しかるらむ
- 28 山里は 冬ぞさびしき まさりける 人めも草も かれぬと思へば
やまの 山里は 冬ぞさびしき まさりける 人めも草も かれぬと思へば
- 29 心あてに 折らばや折らむ 初霜の おきまどはせる 白菊の花
こころ 心あてに 折らばや折らむ 初霜の おきまどはせる 白菊の花
- 30 ありあけの つれなく見えし 別れより あかつきばかり うきものはなし
ありあけの つれなく見えし 別れより あかつきばかり うきものはなし

- 31 朝ぼらけ ありあけの月と 見るまでに 吉野の里に ふれる白雪
32 山川に 風のかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり
33 ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花のちるらむ
34 誰をかも する人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに
35 人はいさ 心もしらず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける
36 夏の夜は まだ宵ながら あけぬるを 雲のいづこに 月やどるらむ
37 白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける
38 忘らるる 身をば思はず ちかひてし 人のいのちの 惜しくもあるかな
39 浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど あまりてなどか 人の恋しき
40 しのぶれど 色にいでにけり わが恋は 物や思ふと 人のとふまで
41 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人しれずこそ 思ひそめしか
42 ちぎりきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波こさじとは
43 あひみての のちの心に くらぶれば 昔は物を 思はざりけり
44 あふことの たえてしなくは なかなかに 人をも身をも 恨みざらまし
45 あはれとも いふべき人は 思ほえで 身のいたづらに なりぬべきかな
46 由良のとを わたる舟人 かぢをたえ ゆくへも知らぬ 恋の道かな
47 八重むぐら しげれる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり
48 風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけて物を 思ふころかな
49 みかきもり 衛士のたく火の 夜はもえ 昼は消えつつ 物をこそ思へ
50 君がため 惜しからざりし いのちさへ 長くもがなと 思ひけるかな
51 かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしもしらすじな もゆる思ひを
52 あけぬれば 暮るるものとは しりながら なほうらめしき 朝ぼらけかな
53 なげきつつ ひとりぬる夜の あくるまは いかにかに久しき ものとかはしる
54 忘れじの ゆくすゑまでは かたければ 今日をかぎりの いのちともがな
55 滝の音は たえて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ
56 あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの あふこともがな
57 めぐりあひて 見しやそれとも わかぬまに 雲がくれにし 夜半の月かな
58 ありま山 めなの笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする
59 やすらはで 寝なましものを さ夜ふけて かたぶくまでの 月をみしかな
60 大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立
61 いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな

- 92 わが袖は 潮干にみえぬ 沖の石の 人こそしらね かわくまもなし
- 91 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき ひとりかも寝む
- 90 見せばやな 雄島のあまの 袖だにも ぬれにぞぬれし 色はかはらず
- 89 玉のをよ たえなばたえね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする
- 88 難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや 恋ひわたるべき
- 87 村雨の 露もまだひぬ まきの葉に 霧たちのぼる 秋の夕ぐれ
- 86 なげけとて 月やは物を 思はする かこち顔なる わが涙かな
- 85 夜もすがら 物思ふころは 明けやらで 闇のひまさへ つれなかりけり
- 84 ながらへば またこのごろや しのばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき
- 83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
- 82 思ひわび さてもいのちは あるものを 憂きにたへぬは 涙なりけり
- 81 ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただありあけの 月ぞ残れる
- 80 長からむ 心もしらず 黒髪のみだれてけさは 物をこそ思へ
- 79 秋風に たなびく雲の たえ間より もれいづる月の かげのさやけさ
- 78 淡路島 かよふ千鳥の なく声に 幾夜ねがめぬ 須磨の関守
- 77 瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ
- 76 わたの原 こぎいでてみれば 久方の 雲ゐにまがふ 沖つ白波
- 75 ちぎりおきし させもが露を いのちにて あはれ今年の 秋もいぬめり
- 74 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ はげしかれとは 祈らぬものを
- 73 高砂の をのへの桜 咲きにけり 外山のかすみ たたずもあらなむ
- 72 音にきく たかしの浜の あだ波は かけじや袖の ぬれもこそすれ
- 71 夕されば 門田の稲葉 おとづれて 芦のまろやに 秋風ぞ吹く
- 70 さびしさに 宿をたちいでて ながむれば いつこもおなじ 秋の夕ぐれ
- 69 あらしふく み室の山の もみぢばは 竜田の川の 錦なりけり
- 68 心にも あらでうき世に ながらへば 恋しかるべき 夜半の月かな
- 67 春の夜の ゆめばかりなる 手枕に かひなくたたむ 名こそをしけれ
- 66 もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに する人もなし
- 65 うらみわび ほさぬ袖だに あるものを 恋にくちなむ 名こそをしけれ
- 64 朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の網代木
- 63 いまはただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで 言ふよしもがな
- 62 夜をこめて 鳥のそらねは はかるとも よに逢坂の 関はゆるさじ

- 93 世の中は つねにもがもな なぎさこぐ あまの小舟の つなでかなしも
よ なか
- 94 み吉野の 山の秋風 さ夜ふけて ふるさと寒く 衣うつなり
よしの やま あきかぜ よ さむ こうも
- 95 おほけなく うき世の民に おほふかな わが立つ袖に 墨染の袖
おほけなく うきよのたみ おほふかな わがたつそま すみぞめ そで
- 96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは わが身なりけり
はな あらしには ゆき ふりゆくものは わがみなりけり
- 97 こぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くやもしほの 身もこがれつつ
こぬひと まつほのうら ゆなぎに やくやもしほの みもこがれつつ
- 98 風そよぐ ならの小川の 夕ぐれは みそぎぞ夏の しるしなりける
かぜ そよぐ ならの小川 ゆぐれは みそぎぞなつ しるしなりける
- 99 人もをし 人もうらめし あぢきなく 世を思ふゆゑに 物思ふ身は
ひとをし ひと うらめし あぢきなく よをおも 物思ふみ
- 100 ももしきや ふるき軒ばの しのおぶにも なほあまりある 昔なりけり
ももしきや ふるきのきばの しのおぶにも なほあまりある むかし

◆参考文献

『評解 新小倉百人一首』

京都書房